

# 説話詩人クラブ

村上 至 孝

クラブを写実詩人と呼ぶことは、彼の一特性を指示するけれども決して彼の全容を伝えはしない。彼は遠く中世の昔大詩人チャーサーがしたように、人情世態の数々を韻文で物語った説話詩人である。クラブの詩編あるいは詩集の表題にしばしば「物語」 ('tales') の語が使われているのも彼の意図を暴露していないだろうか。ただ『キャンタベリ物語』のばあい滑稽譚を多く含むに對し、クラブの話題には悲愁、陰惨な色調のものが圧倒的に多い。イングランドの片隅、淋しい村や町の名もなき人びとの間にもギリシア悲壯劇やシェイクスピア悲劇に劣らぬ人間の欲望、抗争、そして挫折、失意が烈しく渦巻いている様を見慣れていたクラブとしては、こうした暗い題材の方が歌いやすかったのであろう。なおこの種の作品には幻想的な、怪奇なものもあり、クラブは単なる写実詩人ではなく、想像力豊かなロマンチックな詩人であったことを証している<sup>あか</sup>。

クラブは思想・政治・社会の変革期、従って文芸思潮も新旧交代する動揺の時代に生きたが、多くの文学史家の説くところでは、クラブはまさに崩れんとする新古典主義の最後の孤塁を守った詩人ということになっている。しかしこの分類は単純に過ぎるし、新古典派の呼名だけでは包みきれないものをクラブは持っている。なるほど彼は、詩形としては終始一貫ポウプ、ジョンソンに倣ってヒロウィク・カプレットに固執した。また題材においても、クラブは夢の世界、理想の国を歌わないで身近な現実を歌った。イギリスの僻陬の貧しい町や村において毎日繰り返されている平凡な人間の恵まれない生活、ただそれだけが彼の文学にとって問題であった。技巧は拙劣であろう。詩形の工夫に怠慢であったであろう。だが彼には、バーンズやワーズワスと同じく貧しく名もなき民衆に対する深い同情があった。

数回の上京と晩年スコット訪問のためのエディンバラ旅行などを除き、主として郷里サフォーク州内の各地に田舎牧師を勤め、職務の余暇は植物、昆虫、化石などの採集と読書作詩を唯一の楽しみとしながら太平閑雅の一生を過ごしたクラブであるが、一見時勢に對し無関心乃至反動的に見えながら、時の流れと方向を同じくして彼独自の新しいものを加えている。プロノウスキは、クラブがブレイクと並んで新しい時代を早く感知した詩人であると述べているが、<sup>(1)</sup>古めかしいクラブの詩も意外に近代的志向を含んでいるのである。

クラブはその永い生涯を通じて常に作詩の筆を棄てることなく、老境に入っても一万行を越える長編『館の物語』 (*Tales of the Hall*) を完成し、なお続いて「物語集一遺稿」 (*Posthumous Tales*) として死後出版の8巻本『詩集』 (*Poetical Works*, 1834) に収めら

れた22編の説話詩を書いた。事実クラブの作品は相当膨大な量に上り、A. W. Ward の編集したケンブリッジ版『詩集』は3巻2,111頁に亘っている。ただし、こんにちこの全作品の通読を一般読者に求めることは無理なので、早くはフィッツジェラルドによって、近くは F. L. ルーカスなどによって、適当な短編と長編中の章、節とを抜萃し解説を付した選集が編まれている。<sup>(2)</sup>しかしクラブに対する正しい評価はあくまで全作品の通読を俟って初めてなされるべきであることはもちろんであり、新古典主義の末期からロマン主義の全盛期にかけて活動し、ジョンソン、バーク、バイロン、スコット、テニスンなどの賞讃を得たばかりでなく、当時の一般読者の間にも好評をもって迎えられていたクラブであれば、今は忘却の淵に潜む二、三流詩人の一人として頭ごなしに冷評し去ることは、評者の軽卒と不遜に他ならぬであろう。

初めにも述べたように、ふつうクラブはリアリズムの詩人と呼ばれる。早くバイロンが彼を評して「自然を最も厳しく、しかも最も見事に描く人」(‘Nature’s sternest painter yet her best’)と言った言葉が、クラブの碑銘の結句にも採り入れられて、クラブの特色を最も簡潔かつ適切に表わすレッテルのようになっている。彼の伝記と作品批評とを併せ含む最も丹念精密で膨大なクラブ研究を完成したフランスのユション (René Huchon) も、その労作の表題を *Un Poète Réaliste anglais, George Crabbe 1754—1832* (Paris, 1906) と名づけている。L・スティーヴン、エインチャなどの批評もこれと同じ線に沿っており、クラブのリアリズムを中心に長短得失を検討し批判している。<sup>(3)</sup>たしかにリアリズムがクラブの詩風の顕著な特色であり、その故に彼が同時代の詩壇に独自の地歩を保ったことは否定できぬ。しかしながら、F. L. ルーカスも言うように、クラブはリアリストたる一面とまた別にロマンティシストの面も備えていたこと、また彼のリアリズムが科学的と言うよりも人道主義的であったことを十分考慮に入れねばならない。<sup>(4)</sup>彼の本領は、単に実人生の赤裸々な諸相を仮藉なく写し出して読者の心胆を寒からしめる暴露詩人たるよりも、さらに広く浮世の様々な場面を描きつつ読者の哀感を誘い同情を喚起する説話詩人たるにあったのではなからうか。彼の伝記を書いた息子のジョージも、クラブが自然の風景よりも人間を観察することを喜んだと告げているが、もちろんリアリズムは自然だけでなく人間生活を極力正確克明に写すものであるにしても、人間の考察が温かな人間性に支えられるとき、人間の運命と取り組む血と涙の文学へと必然的に発展する。後に触れる予定であるが、韻文の小説——厳密には短編小説——を書くことがクラブの意図であり、歓びであり、功績ではなかつたらうか。事実彼の作品は大半説話詩であり、その名も「物語」と銘打たれているのである。

さてクラブの第一作『村』の出版(1783)から「教区の記録」を含む『詩集』の上梓(1807)まで、24年の長い沈黙期が続く。この期間は、牧師としてまた一家の主としてクラブの身辺も多忙ではあったが、一つには詩人として自己の進むべき道について色々心を砕き思いを凝らした沈潜の期間ではなかつたかと思う。特に注目を引くことは、彼がこの

## 説話詩人クラブ

間に小説を三編も書き上げ、しかも未発表のままこれらを火中に投じていることである。これよりはるか以前彼が小説執筆の意志を持ったことは、彼自身の日記に見えている。

「今の主な仕事が完成して暇があれば小説を書くかもしれぬ。かつて小説はいつもよく売れるものだったし、たぶん今頃でも同じだろう——だがこの件はまた後で考えることにしよう。」<sup>(6)</sup>

三編の小説については、息子ジョージがおぼろな記憶を辿ってわずかな片鱗を伝えているに過ぎないが、それをそのまま借りることにしよう。

「第一のは『グレイ後家』という題であったが、これについて憶えているのはただ、主要人物がアリソン博士とかいう慈悲深い愉快な人物だったことだけである。次のは『レヂノールド・グランショウ、別名、成功を克ちえたる男』と呼ばれ、不遜暴慢で野心的だが、寛大な美徳によって面白味を与えられ、次第に気力衰えて痴呆になる精神を写したものであった。このグランショウを描いた筆力は非凡だったと確信するが物語の細部は拙劣であった。第三の小説の題は忘れたが、はっきり憶えているのは、彼の詩に出るものとよく似たみじめな部屋の描写から始まっていたことと、韻文で書かれた同様の場面の効果に比してこれの効果が劣っていると母が卒直に評したのに対し、父が朗読を中止して暫く考えこんだ後『たしかにお前の言う通りだよ』と言ったこととである。」<sup>(7)</sup>

恐らく、構成の緊密、会話の生彩、行文の暢達などといった点に不足があり、決して傑出した作品ではなかったであろう。クラブが自ら闇に葬ったことを惜しむにも当たるまい。たまたまこの時代は、ちょうどフィールディングやスモレットの豪放で諧謔味豊かな小説が栄えたあと、ジェイン・オースティンの精密な風俗小説が現われるまでの空白期に当たり、クラブはその空白を埋めるのに散文を用いることを断念し、ついに韻文を以ってその役目を果たしたわけである。ロマン派が詩壇を圧倒していたこの時代に、かなり冗長なクラブの韻文物語が次々と好評を以って迎えられた原因は、案外ここにあったのではなからうか。「教区の記録」(1807)から『自治都市』(1810)、『歌物語』(1812)、『館の物語』(1819)など彼の主要な作品は、いずれも人生の断片に取材したスケッチ集である。

ところでクラブは、これらの作品全部を通じ、詩形はヒロウィク・カプレット一点ばかりで押している。この点について多くの批評家はただクラブの保守性を示す以外の何ものでもないといった非好意的な見方を採っている。例えばL・スティーヴンは、「毛糸の沓下を穿けるポウプ」('Pope in the worsted stockings')<sup>(8)</sup> というホレス・スミスの言葉を引き、また別の箇所でも次のように述べて不満の意を表している。

「彼がポウプの韻律を使ったのは、それが公認されたほとんど唯一の詩的表現手段となっていたからである。また同時代の詩人たちが新しい韻律を採り入れて後なお彼がポウプの韻律法に固執したのは、一つには彼が骨の髄まで旧弊だったからであり、また一つにはおのずから旋律の新形式を生み出す高貴な靈感を全然知らなかったからである。」<sup>(9)</sup>

言うまでもなくヒロウィク・カプレットは、ドライデンの後を承けてポウプが彫琢洗練を施し完全の極致に仕上げたものであり、ジョンソンもこれを絶賛し、18世紀新古典派詩人たちが唯一無二の詩形であるかのように愛用したものであるが、ここでわれわれは、17、及び16世紀を飛び越えて遠く中世の偉大な説話詩人チョーサーもまた『キャンタベリ物語』の中で多く2行押韻の詩形を使っていることを想起せねばならない。たしかにクラブの韻

## 説話詩人クラブ

文はあまり美しくはない。粗雑であり、生硬であり、冗漫であり、平俗である。しかしながら、あたかも雄大な叙事詩に無韻体がふさわしいように、平凡な浮世の諸相を写す説話詩には2行押韻のヒロウィク・カプレットがしっくり適合し、作者が話の糸を繰り延べてゆくのに重宝でもあれば、読者がこれを辿るのにも便利である。ワーズワス以下ロマン派の詩人たちがヒロウィク・カプレットを目の敵にして罵倒したからとて、この詩形そのものが直ちに平板空疎な詩形だと速断してはならない。ポウプの垂流者たちが熱のない陳腐な教訓詩に用いたためにこそこの詩形はすっかり信用を落としてしまったが、詩の種類によっては、これこそ内容に生命を吹きこむ必然的形式となるのである。なお、クラブがどれだけチャーサーを愛読していたか確証できる資料はないが、作品の多くの表題に「物語」という語を使っていることにも、彼がチャーサーを意識していたことが伺えるであろう。

「教区の記録」は、牧師が教区記録簿を繰りながら「貧しき村人たちの素朴な歴史」を語るもので、「洗礼」、「結婚」、「埋葬」の三部に分かれる。なお第一部の初め276行は全編の序文をなすもので、アダムとイヴの墮落、ノアの洪水より後地上に「麗しきオーバン」だのエデンの園だのは存在せず、人生は苦の世界であって（23—26行）、「努力、注意、忍耐は寡欲の少数者に幸を与え、恐怖、汚辱、困苦は思慮なき人びとの群を追う」（29—30行）という主旨が述べられ、多分に説教詩の風を帯びている。この節の中で貧民窟の室内を描写した条などはクラブ自身の観察から生まれた凄惨辛辣なものであるが、やがて数行置いてその原因を反省し一くさり説教を試みている。

Whence all these Woes?—From want of virtuous will,  
Of honest shame, of time-improving skill ;  
From want of care t'employ the vacant hour,  
And want of ev'ry kind but want of power,

*The Parish Register*, I, 226—29.

従っていよいよ本題に入って村人の生活記録を語る場合にはこうした作者の主観は表面に出ないけれども、一応かような考えを頭に置いて物語を展開していることは読者にもおのずから感じられるのである。

さて、この詩編における「洗礼」、「結婚」、「埋葬」の三分は、内容的にはあまり重大な意味はない。いずれの部も、老若男女さまざまの人間の運命をスケッチした小話から成り、ことに恋愛や結婚の失敗を主題にしたものが多い。父の許しを得ずにいきな船員と恋に落ちて不義の胤を宿し、男は折から勃発した対フランス戦争のため水兵に徴集されて戦死してしまう「粉屋の娘」ルーシィの話（第一部、277—402行）、粗暴な仕立屋の職人に誘惑されて結婚し、貧と病に苦しむフィービ・ドウソンの話（第二部、131—246行）などその代表的なものであろう。これと反対に、十分慎重に配偶者を選び、勤勉と節儉とによ

## 説話詩人クラブ

って家庭を保つ男女は幸福な生活を 恵まれるのであって、第一部の ロバートとスーザン（403—448）、第二部のリューベンとレイチェル（431—460）などがこれを例証する話である。

この詩は長編としては比較的好くまとまったものであるが、登場人物の個性がとかく不明瞭であり、また上に挙げた実例からも察せられるように、筋の似通った話が重なって変化に乏しいうらみがある。しかしながら、『村』時代のように人生の悲惨をあくどく描くという立場から作者は一步前進し、薄幸に泣く男女に温かな同情を寄せながら淡々としてあるがままの人生を語っている。韻文を使ってはいるが、一面では小説の領域への新しい冒険であり、疑いえずに真実、共鳴せざるをえぬ哀感の故に読者大衆を引きつけたのであって、エインギャの指摘する如く、クラブは『サイラス・マーナー』や『アダム・ビード』に50年先立つイギリス田園小説の創始者とも言えるのである。<sup>(60)</sup>

『村』によって世に出ることのできたクラブは、次にその眼を町に転じ、前者よりはるかに大規模な『自治都市』を書き上げた。これは全体の調子から言えば『村』の血筋を引いているが、前後8年の日子を費した1万行を越える大作で、同じく写実的と言っても暴露的、慨世的傾向よりも人道主義的、説話的傾向が強く現われている。作品の体裁は、詩人が知人に町の様子を報告する一連の書簡ということになっていて、それが全部で24通あり、町の全景描写を冒頭に、教会、牧師たち、非国教徒、選挙、弁護士、医師、商業、娯楽、社交の集い、料亭、俳優、救護院、病院、貧民、刑務所、学校の順序で、町の生活をあらゆる角度から照らし出している。<sup>(61)</sup>しかしながら、あまりに多くの材料を抱えこんで完全に消化しきれず、クラブの短所である出来栄えの不揃いが一そう目立ち、包括的に是非の評を下すならば、まず失敗の作と答えたい。ただこの詩について特に注意すべきことは、クラブが単に写実のために写実を喜ぶのではなく、赤裸々な人生を描くことによって人間精神に課題を提出していること、24書簡のうち救護院や貧民に9通を割き、社会の落伍者たち7人の男女の経歴を物語っていることである。クラブは序文において自からこう語っている。

「従って私は次のような希望を持っていないではない。すなわち、入獄というこの陰鬱な題目、ことに刑を申し渡された追剥の夢でさえ、ある人びとの心に憐憫と嫌悪とをこもごも起こさせるであろう。そしてこの入りまじった気持はわれわれの感情にとって必ずしも不快でないと同時に、有益な作用をなすものである。それは万人に共通な感動によってわれわれを全人類に固く結びつけ、自からは墮落することなしに、最も罪深くみじめな同胞にまで多少つながりを持たせる。」（第1巻、279—280頁）

全編のうち救護院の収容者たちを描いた3書簡はいずれもかなり簡潔であり、性格描写として成功している。描かれる男女は三者とも性格の欠陥や悪習によって身を滅ぼす人間ばかりである。すなわち、ブレイニィ（第14信）は生来の浪費癖のために、親から譲られた身代も、妻の持参金も、親戚から転げ込んだ遺産も、次々と瞬く間に蕩尽し、クリーリア（第15信）は虚栄心強く遊び好きで、まっとうな結婚生活に入れずに身を持ち崩し、そ

れぞれ今は救護院の世話になっているが、今なお過去の失敗に目が覚めず、互いに若き日の贅沢や自由を懐しく語り合うのである。いま一人のベンボウ（第16信）は大酒飲みで、折角父の商売を継ぎながら飲み友だちにまんまと欺され、ついにアル中患者として救護院に拾われ、昔の飲み友だちの誰彼を思い出しつつ懐旧淡に心を慰めている。

上の3書簡から少し距てて、町の貧民たちを描いた同巧異曲のものが4編あるが、前者より長編で小説的構成が整っており、かつ、本来は真面目な人間がふとした心の油断から墮落する運命のいたづらを描くものが多い。<sup>(12)</sup>例えば、教区の書記（第19信）は、信仰も篤く、職務にも忠実な模範的人物であったが、たまたま或る年教会の収入が少なかったところから礼拝堂の喜捨金をくすね、それから癖づいて同じ悪事を重ねるうちとうとう現行犯を押さえられる。次のエレン・オーフォードは、幼いとき父が死んでその後母が再婚したため気むずかしい継父にこき使われ、二十の頃軽薄な男の誘惑にかかって白痴の女の子を生み、やがて或る商人と結婚するが家運は傾いて夫は死んでしまい、暫く私塾を開いて楽しい毎日を送ったのも束の間で失明し、ただ神を信じ人類を愛することに慰めを得て余生を送っている、一生不幸の連続であってこんな例もそう多くはあるまいと思われるが、この書簡でクラブは、当時の小説の内容が虚妄に満ちていることに酷しい非難を浴びせている。<sup>(13)</sup>

次に、第21信の主人公エイベル・キーンは、もと貧しい小学校教師であったが実業界に身を転じて或る商館に勤め、他の社員たちの風に倣って生活がすっかり派手になる。ところが商館主が死んで会社は潰れ、キーンも再び貧乏暮らしに戻って恐しい憂鬱症に取りつかれ、野外をほっつき廻ったあげく遺書を残して首を吊る。人間の運命は何と変転極まらないことであろう。禍福はあざなえる縄の如し、貧乏が不幸か裕福が幸せか一概には断定できない。そうであればこそ人びとの織り成す人生模様は複雑多彩であり、クラブはその一斑をこの物語に鮮やかに再現しており、その手法にはモームの短編小説を連想させるものがある。

続く第22信「ピーター・グライムズ」は、E.M・フォースターが特に賞讃している一種の怪談であるが、<sup>(14)</sup>主人公ピーターは老父にも孝養を尽くさず、助手として雇い入れた少年を次つぎに3人までも虐待して死に至らしめ、その結果彼が漁場に出るたびに父と少年たちとの亡霊が現われて彼を悩ます。

I fix'd my eyes

On the mid stream and saw the spirits rise ;  
I saw my father on the water stand,  
And hold a thin pale boy in either hand ;  
And there they glided ghastly on the top  
Of the salt flood, and never touch'd a drop ;

説話詩人クラブ

I would have struck thum, tbu they knew th'intent,  
And smiled upon the oar, and down they went.

'Peter Grimes' ll. 306—13.

ついにグライムズは気が変になり、或る日近所の人びとに懺悔話を語り、その話を終ると同時にふっとり息絶えてしまう。

「教区の記録」にはっきり現われ、『自治都市』でやや後退したクラブの説話詩に対する興味と才能とは、次の『歌物語』（*Tales in Verse*, 1812）に至って遺憾なくその面目を発揮した。クラブの本領が最もよく現われた作品、クラブが最も成功した作品と言ってよいであろう。これはその題の示す通り、韻文で書かれた物語集であって、第一話から第二十一話まで各おの独立した短編から成っている。彼の三大説話詩のうち、さきの「教区の記録」は、一牧師が記録簿を繰りつつ語る体裁を取り、のちの『館の物語』は、兄の屋敷で主として2人の兄弟が互いに談話を交える形式になっているのに対し、『歌物語』では、全体を統一する形式的な枠は強いて設けられていない。数々の物語が、クラブの郷里オールドバラをはじめ彼が牧師として居住した土地、サフォク、ウィルトシャを舞台にし、彼自らの体験をも含めて彼の親しく見聞した事件を題材に取っている意味で情調的にはもちろん全21編が一つに融合しているのである。彼自ら序文の中で次のように述べていることは特に注意せねばならない。クラブは説話詩人だと言っても一から十までチョーサーに追随したわけではなく、それは彼の人生経験や歴史的状況から見て賢明な道であった。

「チョーサーやボッカチオの構成法に倣うことは無意義だ。……親切な忠告者の意見に従わぬのは心苦しいが、詩編全体の構成上の統一は目ざさないで、ただ同じ作者の手に成り、読者を楽しませるという同一目的を旨とす作品集、というだけの一貫性を与えるに留めた。」

なお各物語の序詞としてシェイクスピアから優れた章句を四つ、五つずつ引用しているが、これは、田舎暮らしで観劇の機会こそ乏しかったであろうにも拘らずクラブが日頃シェイクスピアに傾倒し、その全脚本を熟読玩味していたことに由来すると思われる。そして、詩劇が自らの力に余ることを十分弁えたクラブはその代りに説話詩を選んで、ちょうどシェイクスピアが舞台に展開したと同じものを、ただ誦まれ聴かれ想像される韻文物語の中に盛りたいと願った気持をここに読みとることもできるように思う。

この詩の序文についてはいまさき触れたが、これはクラブの詩論を表明したものとして、短いながら重要な文献である。周知の如くワーズワス、コウルリッジの『抒情民謡集』の出たのが1798年であって、この2人の先達に続いてバイロン、シェリイが青春の情熱を思うさまたぎらせ、奇しくもクラブの『歌物語』と同年、しかも5か月早い3月初めに、例の「われ一朝にして名を成せり」と作者自らをも驚喜させた『貴公子ハロルドの巡遊』が読書界の人気を引っさらっていた。『文芸評伝』の出たのは1817年であるが、コウルリッジのロマン主義批評が文壇を圧倒している折でもあった。「痛ましき現実の精細なる描写」

を主眼とするクラブの詩風は幸にして一般の好評を得はしたが、文壇の新しい気運を思えば彼の胸中は寂莫を禁じえず、彼の焦慮苦悩している有様が行間に揺曳するようである。彼は、「詩人の眼は狂おしく<sup>めく</sup>転りつつ」との有名なシェイクスピアの句を引いて、超自然的なものを歌う幻想的な詩のみが真の詩であるとする説に抗議し、<sup>16</sup>「ジョーサー、ドライデン、ポープなどに見る写実詩あるいは諷刺詩の意義を強調する。もちろん詩はあくまで詩であって現実でない。現実の美醜を一切包括して一段高い美の世界を創造するのが芸術である。クラブも、すべて現実暴露を韻文形式に包んだものが詩になるというような暴論を吐くものでは決してなく、「詩の効果は、実生活の痛ましい現実、日常の煩勞、果てしなく継起する不快などから精神を高め、精神に多少の興味と満足とを以って静観できるような対象を代置することによってこれを憩わしめるにある」ことを承認した上「現存の人物の正当な表出、いな、痛ましい現実、日常の煩勞、果てしなく続く不快などの忠実な描写すら、それが読者自身の煩勞や苦難でない限り、そうした効果をことごとく生み出せるではないか。」<sup>17</sup>と反駁している。従って彼の結論はこうである。

「実際私は、読者の精神に与えるこの快い効果なるものは、語られる事件（現実のもの、仮空のものいづれたるを問わず）にも、登場人物（人生、空想のいづれから取ったものかを問わず）にも依らず、詩そのものを構成する手法如何に依ると考えざるをえないのである。それさえ賢明になされれば、人生から実際に写し取られた事象であっても、創造的空想の案出したものと同様の優れた効果を持つであろう。」<sup>18</sup>

さて全体21編の中から代表的なものを選ぶとすれば、第2話「別れの時」、第4話「遷延」、第16話「秘密を托せし友」、第20話「兄弟」を推したい。このうち初めの2編は男女の結びつきを<sup>あやっ</sup>操る運命的なものを描いている。なお、第10話「恋する男の旅」は、クラブ自身若き日に許婚のセアラ・エルミ嬢を訪ねたときの体験に基づき、愛する女を訪ね行く男の期待または危惧によって途中の自然あるいは晴れやかあるいは佗びしく目に映る様を歌った素朴なものとして多くの批評家が賞めているが、むしろ抒情詩的な趣きが濃く、物語としては単純で変化に乏しい。しかも抒情詩としては、同じテーマを扱ったワーヅワスの「われは知りぬ恋心の<sup>あや</sup>異しき高ぶりを」や、ハーディの「われライオネスに旅立ちしとき」の軽快な調べを欠いている。

第2話「別れの時」：すべての男女の愛が終生渝らぬものであり、いかなる障害をも克服して永久に続くものであるならば、人生の悲劇はその半ば以上が姿を消すであろう。若い女の行手にしばしば待伏せしている誘惑、男の移り気、結婚していても永い別居のためふと犯しやすい過ち等々、地上の愛の花はあまりにも烈しい風雪に虐げられ、毒汁を含む害虫に蝕まれる。この物語は、永年消息不明となっていた男の許婚が、他の男の求愛を受け入れて結婚し、やがてその夫は死に子供も遠方へ出かけて独り寂しく暮らしていたところへ、初めの婚約の相手が40年ぶりにひょっくり戻って来る話で、後のテニソンの『イノック・アーデン』や、ハーディの『同じ町の男たち』と一脈相通ずるものがある。しかし



ハーディの短編のように深刻な暗いものでなく、結末は円満であり、むしろ甘い哀愁を漂わせた、しっとりと心に沁みる海港挿話である。アレン・ブースとジューディスとは小学校時代からの幼な馴染、筒井筒の仲で、それぞれ若者となり乙女となると共に未来を誓う恋人同士となる。ところがやがてアレンは西インドの親戚に呼ばれてどうしても渡航せざるをえない。二人は別れを惜しみながら渚を散歩する。

But his own Judith call'd him to the shore,  
Whom he must meet, for they might meet no more ;—  
And there he found her—faithful, mournful, true,  
Weeping and waiting for a last adieu !  
The ebbing tide had left the sand, and there  
Moved with slow steps the melancholy pair :  
Sweet were the painful moments—but how sweet,  
And without pain, when they again should meet !  
Now either spoke, as hope and fear impress'd  
Each their alternate triumph in the breast.

'The Parting Hour ; ll. 121—30.

しかしこの日から三年経ち、五年経ち、待てど暮らせどアレンは帰って来ない。ついに十年空しく待ったジューディスは、アレンを亡き者とあきらめて他の男の許に嫁ぐ。それからまた二十数年、夫は死に、成人した子供は家を飛び出して遠くで職に就き、ジューディスは誰一人頼るべき者もない独り暮らしをしている。別れてからちょうど40年目、老いさらばえたアレンが或る日ひょっくり戻って来たが、町には知った顔もなく、まるで異郷から流れ着いた者のようである。

Thus where he lived and loved—unhappy change !—  
He seems a stranger, and finds all are strange.

'ditto,' ll. 283—84.

しかしジューディスは忘れていなかった。ついに2人は顔を合わす。

The once fond lovers met ; not grief nor age,  
Sickness or pain, their hearts could disengage :  
Each had immediate confidence ; a friend

Both now beheld, on whom they might depend :  
'Now is there one to whom I can express  
My nature's weakness and my soul's distress.'  
Allen look'd up, and with impatient heart—  
'Let me not lose thee—never let us part :  
So Heaven this comfort to my sufferings give,  
It is not all distress to think and live.'

'ditto,' ll. 295—304.

互いに身の上を語れば、アレンは西インドへ渡る途中でスペイン海賊船に襲われて奴隷に売られ、西インドの銀山で鉱夫として働いているうち主人の寵愛を受けてその地のスペイン女と結婚する。しかしやがて新教徒であるがゆえに迫害され、妻子と別れて各地を転々したあげく、いま辛うじて郷里へ辿り着いたのであった。今は2人とも、本来の意図でなかった過去40年の生活を葬って結婚するが、初めのうちアレンは時どき西インドの妻子を夢に見て寝言を言い、傍に坐って編物をしているジューディスに軽い嫉妬を覚えさせる。この1編は描写にむだがなく、筋の選びが軽快で、不思議な運命に結ばれた一組の男女の、若き日と老境とそれぞれ趣きを異にした二種の愛情が濃やかに描き分けられている。とにかく「末良ければすべて良し」であり、千里を距ててそれぞれ苦難の数十年を過ごした男女が共に渝らぬ愛を守り続けた末最後にめでたく結ばれるので読者もほっとする。貧しい人、病める人たちの苦しみを描いた写実詩人としてのクラブは厭世家と映るかもしれないが、説話詩人としての彼はむしろ楽道家であり、彼の物語詩が一般読者に受けた原因はここにもあったと思われる。

とは言え、もちろんクラブの物語が全部ハッピー・エンディングを持つわけでないことは、すでに見て来た諸編でも明らかである。この『歌物語』でも次の第四話「遷延」は、婚約履行の遷延から起こる破綻の物語である。

'More luckless still their fate, who are the prey  
Of long-protracted hope and dull delay ;  
'Mid plans of bliss the heavy hours pass on,  
Till love is wither'd, and till joy is gone.

'Procrastination,' ll. 9—12.

ルパートとダイナとは婚約の仲であったが、ダイナに金持の叔母がいて結婚の許しを渋っているうちに、ルパートは外国へ出稼ぎに行かねばならなくなり、2人は暫しの別れを惜しむ、ところが後に残ったダイナは次第に叔母の人生観に強く感化されて物質主義的に

なり、もはや恋人の身を案じなくなる。

Now the grave niece partook the widow's cares,  
Look'd to the great and ruled the small affairs ;  
Saw clean'd the plate, arranged the china show,  
And felt her passion for a shilling grow :  
Th'indulgent aunt increased the maid's delight,  
By placing tokens of her wealth in sight ;  
She loved the value of her bonds to tell,  
And spake of stocks, and how they rose and fell.

'ditto,' ll. 92—99.

これによってダイナも貨殖の道に熱中し、やがて叔母が死んで公債も株も屋敷も彼女の手に転げ込み、ますます贅沢の味を覚える。ついに或る日のこと、彼女が豪華な品々で飾り立てていた部屋へ、乞食のようなみすばらしい男がひょっくり顔を出す、外ならぬルパートである。だが彼女はもうこの男に些かの愛情も感じない。

'See! my good friend,' and then she raised her head,  
'The bloom of life, the strength of youth is fled ;  
Living we die ; to us the world is dead ;  
We parted bless'd with health, and I am now  
Age-struck and feeble, so I find art thou ;  
Thine eye is sunken, furrow'd is thy face,  
And downward look'st thou—so we run our race ;  
And happier they, whose race is nearly run,  
Their troubles over, and their duties done.'

'ditto.' ll. 220—28.

拒絶された男は教区の扶助に縋ってみじめな暮らしを続け、その後街頭で時どきダイナに出会う折もあるが女は同情の一言さえかけてくれない。女の物質主義的本能と虚栄心とを鋭く衝いた物語で、いくぶん不自然な感じもするが、強いて皮肉を混じえず淡々と書き流しているところに、却って軽薄な女性への辛辣な諷刺がよく利いている。

(3) 「秘密を托されし友」：クラブの描く人生は暗黒面ばかりではなかった。あまりにも数多い人の世の不幸もわれわれ自身の心構えによってこれを幸福に転ずることができる。ハーディの小説に見るように冷酷な運命に奔弄されてますます泥沼の底深くはまり込んで

説話詩人クラブ

ゆくのでは人生に所詮光明がない。クラブは人生の醜悪に眼を蔽う者ではなかったが、また厭世的な運命論者でもなかった。英国教会の平凡な一牧師として、人間の愛と謙虚とが逆運の暴力をも挫きうることを信じた。この物語のヒロインたるアナは、さるお邸の夫人に侍づく美しくて純真な娘であったが、正直で勤勉な卿士スタフォードに見込まれてその妻になり、円満な家庭生活を楽しんでいる。ところがこれよりさきアナがまだ十五の小娘で父母の家に行った頃、アイルランド人の大尉セドリという三十男に騙されてその胤を宿し、外聞を憚って友人イライザの許に身を寄せ、そこで無事身二つとなったが、生まれた子供は間もなく死に、結局この一件はイライザを除いて世間は誰一人知らずそのまま闇に消えていたのである。さて、アナが幸福な結婚生活に入ったに引替え、イライザは早く夫に先立たれ、幼い子供を抱えて貧苦に悩み、アナに対する羨望から、アナの秘密を握っている自己の立場を悪用し、アナに生活扶助を求めて次第に脅迫がましい態度に出る。イライザからの第一信はこうである。

'One eve, the wife, still happy in her state,  
Sang gaily, thoughtless of approaching fate ;  
Then came a letter, that (received in dread  
Not unobserved) she in confusion read ;  
The substance this—'Her friend rejoiced to find  
That she had riches with a grateful mind ;  
While poor Eliza had from place to place  
Been lured by hope to labour for disgrace ;  
That every scheme her wandering husband tried,  
Pain'd while he lived, and perish'd when he died.'  
She then of want in angry style complain'd,  
Her child a burthen to her life remain'd,  
Her kindred shunn'd her prayers, no friend her soul sustain'd.  
'Yet why neglected? Dearest Anna knew  
Her worth once tried, her friendship ever true ;  
She hoped, she trusted, though by wants oppress'd,  
To lock the treasured secret in her breast ;  
Yet, vex'd by trouble, must apply to one,  
For kindness due to her for kindness done.'

'The Confidant', ll. 180—98.

スタフォードは妻の不安を見ていろいろ慰めるのでアナは暫く元気を取戻す。

説話詩人クラブ

A few succeeding weeks of brief repose  
In Anna's cheeks revived the faded rose ;  
A hue like this the western sky displays,  
That glows awhile, and withers as we gaze.

'ditto', ll. 265—68.

しかしイライザの要求は回を追うて横柄になり、古疵に触れられるアナは心痛にひどく憔悴する。ついに或る日イライザが直接押しかけて来てむりやりに彼らの家に住み込んでしまう。そのときのアナはちょうど蛇に睨まれた蛙のようにイライザに全々頭が上がりず、文字通り主客顛倒の有様であった。

Her speech was low, her every look convey'd—  
'I am a slave, subservient and afraid.'  
All trace of comfort vanish'd if she spoke,  
The noisy friend upon her purpose broke ;  
To her remarks with insolence replied,  
And her assertions doubted or denied ;  
While the meek Anna like an infant shook,  
Wo-struck and trembling at the serpent's look.

'ditto', ll. 376—83.

数日経つうちにスタフォードはこの二人の女友達同士の応対からほぼ真実を推測し、二人の居る席で或るアラビアの寓話を語って聞かせる。夏の日盛り咽喉の渴きに耐えかねた少年が太守邸果樹園の実を盗んで番人に見つかる。番人は賄賂を請求して不問にはしてやるが、それ以後たびたびこの一件を種に強請ゆすりを繰り返すので少年はいっそ死んだがまじだと思ふ。この強請の場面をたまたま太守が蔭で聞いていたが、彼は快く少年を救してやる。

『歌物語』は二年以内に五版を重ね、クラブの名声いよいよ高く、彼の詩壇における地位も揺がぬものとなったが、彼は更に同じ方向に沿った新しい説話詩集を計画し、毎日30行書くことを原則として筆を進めた。しかしかような作詩方法は余りに機械的であり、クラブの詩才も衰えを見せ始めた証拠であって、事実この新しい作品『館の物語』(*Tales of the Hall*, 1819)は、前作に比べて何らの進歩をも示しておらず、むしろ散漫であり、3,000ポンドで原稿を引受けた出版社主ジョン・マリィの期待に反し、読書界の反響ももはや下り坂であった。すなわちこの頃はバイロンの『貴公子ハロルド』が人気を一手に引擧っている恰好であり、シェリィやキーツの詩集も新しい魅力をもって人びとの注目を集めており、また散文ではスコットが出て久しぶりに小説界の活況を挽回しつつあった。

「館の」という限定語が示す通り、或る館に相会した兄弟と教区牧師とが互いに談話を交えるという体裁で全体に形式的な統一が与えられているが、ほとんど個々独立した物語から成っている。全体13,086行が22巻に分かれ、初めの2巻はこの館の由来、ここに落ち合った兄弟の経歴などを述べ、第3巻以後主として兄弟が、そして時どき晩餐に加わる牧師も、代るがわる自己の見聞した人生の挿話を語ってゆく。兄ジョージは実業界で成功し、今は郷里に隠退して宏壮な邸に悠々自適している独身者で、その異父弟リチャードは海軍軍人として対ナポレオン戦争に出征し、勲章と年金を等て帰郷した後、村の牧師の娘を娶って子供もあるが、兄との交際を遠慮している。ジョージはその消息を聞いて弟を邸へ招き、毎夜ワインを汲み交わしながら数週間に亘って話し合い、最後に弟のために近隣に瀟洒な住宅を買い取って一家を住まわせてやる。これが全編の枠組であるが、兄も弟も共にゆかしい人柄で結末もまことに嬉しいハッピー・エンディングである。もちろん個々の物語には悲劇的なものもあるが、『あらし』を書いたときのシェイクスピアのようにクラブの心境も和やかな安らぎを得たのであろう。

例によって初めに短い序文があり、その中からクラブの作詩態度を要約した一節を引けば、

「詩人の第一の意図は楽しませることになければならぬ。よし教えるつもりであるにしても、彼が伝えようとするその教えを口触りのよい楽しいものになければならぬから、私は道徳家の風を帯びようとか、私の話が人類を裨益することを約束しようなどとは思わない。私はただ次のことに努力し、かつかなりこれに成功した自信を持つ者である。すなわち私が述べたり語ったりした一切のものにおいて、われわれの尊敬せねばならぬ感情や、敬服せざるをえない才能を悪徳と結びつけて人間の悪徳を赦そうとする傾向を含むものは全然導入しないように努めた次第である。」

クラブは決して勸善懲惡を考えて詩を書いてはいない。人生劇場の色いろな場面を見せて楽しませるのが本来の意図であるから悲劇もあれば喜劇もある。『村』を作った頃の彼には醜悪な現実を曝け出して世人の反省を促そうという熱情も大きく働いたに違いないが、さすが老境に入っては、人生を大所高所から眺め、澄みきった山の湖のような心境でもろもろの人事を写すことができた。この意味で『館の物語』は全体の調子がもの柔らかで洗練されている。しかしその反面筋の展開変化、構成の緊密さ、表現の的確、要するに息も継がせず読者を引張ってゆく話の面白さという点では却って衰退<sup>しるし</sup>の徴が見えることを否定できない。

『館の物語』の中には十六の巻「バーバラ夫人、またの名幽霊」と題する、老寡婦とその教え児の少年との結婚という題材を扱った、ポウを連想させる怪奇物語も含まれているが、いまは一々の詩編を取上げないで、代わりに枢機卿ニューマンのこの詩集についての論評を紹介しておこう。

「実のところ私はこの詩を、約30年前に初めて出たとき大へん楽しく読んだし、その後こんにちに至るまでずっと好感を保ってきたし、最近これを取上げてみて従来にもまして深い感銘を受けたのである。」<sup>20</sup>

## 説話詩人クラブ

クラブが在世中多くの読者を得ていたことは、彼の次つぎの詩集が盛んに版を重ねたことでも分かる。同時代の批評家ハズリットは「最も人気のある、最も評判の高い作家の一人」と断言し、その理由を次のように説明している。

「そうなる理由を説明する最上の原理は、われわれを周囲の世界に詰りつける強い絆、とにかく強<sup>(21)</sup>力に直接にその世界を思い出させるものに対する、われわれの無意識の憧憬である。」

この「われわれの周囲の世界」というのはいわゆる庶民の世界であり、町や村の微賤な人間の平凡な営みである、民主主義の着実な発達の前に貴族主義は次第に後退し、産業革命の進展が経済生活を変革しつつあった当時の政治情勢、社会情勢を背景として、また、狭くは読者層が上流有閑階級から広く一般大衆に拡大しつつあった現象を基礎にして、詩人クラブの特異な存在が注目の的になったことは別だん驚くに当たらない事象であった。

彼は折から奔流のような勢いで文壇を席捲しつつあったロマン主義運動に同調せず、片田舎の牧師として十年一日のようにポープと同じ詩形で歌っていた意味で新古典派に数えられるべきであるが、民衆の生活に親しく触れ、温かな愛情をもってこれをおるがまま写したこと、ギリシア、ローマの詩人たちでなくシェイクスピアに親しみ、理窟を説くよりも実話を語るが多かった意味でワーズワス流のロマン派的な性格も備えている。

クラブは説話詩人として読者の好評に包まれ、作家として幸福な生涯を送った。その反面死後は次第に忘れられ、ただ『村』の作者として記憶されるに過ぎなくなってしまった。それは19世紀以後現代にかけての小説の素晴らしい発展が、説話詩の存在理由をほとんど抹殺してしまったからである。しかしながら、フィールドングやスモレットからサッカリィ、G・エリオットなどにつながる近代小説の橋渡しをなすものとしてクラブの説話詩はオースティンの作品と共に重要な意義を持っている。そこには現代の短編小説と同じ人生探求への作者の熱情と鋭い洞察とが見られる。材料は平凡であり、表現も概して粗雑であるが、ユシヨンの言う「家庭詩人」(‘poète de famille’)として、またチャイルドの言う「個人の肖像画の巨匠」(‘a master of the individual portrait’)として、庶民の家庭生活、船乗や商人や農夫などの風貌性格を、社会の変動、運命の転変の背景の上にくっきり描き出すことによって、単に詩だけでなく文学全般の領域において新生面を開いたのである。

クラブはもちろん一流詩人ではなく、膨大な全作品中に駄作も多い。しかし彼の才能が十二分に注ぎ込まれ、筋の発展、人物の性格描写がよく洗練された作品は、こんにちのわれわれにも強く訴えるものを持っている。そして近年ハダキンが強調しているように、クラブの構成法にも語句の使用法にも、一見平凡なようでその実非凡な特性がうかがわれるのである<sup>(23)</sup>。観念的・哲学的でクラブと対蹠なコウルリッチさえ、「クラブはほとんど面白くないが、たしかに一種の力を豊かに備えている。」と率直に認めており<sup>(24)</sup>、テニスン、ニューマン、フィッツジェラルドたちの賞讃は繰り返すまでもないとして、クラブをただ写実詩人とのみ狭く見ないで広く説話詩人として新たな視野から見直すべきだし、彼の同時代人たるロマン派の五大詩人に劣らず広く愛誦されて然るべきだと思ふ。「イーノック・ア

ーデン」や「イヴァンゼリー」が読まれる以上、クラブの『歌物語』、『館の物語』中のせめて数編の説話詩はこんにちの読者に訴えるものを十分備えているのである。

註

- (1) 'Both poets, young men in their twenties, began to look away from the eighteenth-century manner, into a world seen solidly by its shadows.'

J. Bronowski; *William Blake*, p. 57 (Pelican Book)

- (2) 最近の選集では次のものが手頃である。

Howard Mills, ed.: *George Crabbe, Tals, 1812 and Other Selected Poems* (Cambridge Univ. Press, 1967)

- (3) cf. 'But however he may be classified, he possesses the essential mark of genius, namely, that his pictures... stamp themselves on our minds indelibly and instantaneously,' L. Stephen: *Hours in a Library*, vol. III, p. 211.

'Indeed he was hampered, as Wordsworth was not, by a lifelong adherence to a metre—the heroic couplet—with which his same poetic diction was most closely bound up. He did not always escape the effects of this contagion, but in the main he was delivered from it by what I have called a first-hand association with man and nature.

Alfred Ainger: *George Crabbe*, pp. 2—3 (E. M. L.)

なお最近では Raymond Williams がリアリストとしてのクラブを高く評価しているが、これはこの文芸批評家の左翼的立場に由来しており、クラブ批評に特に寄与したものではない。

J. Raymond Williams: *The Country and the City* p. 13, p. 18, p. 26.

- (4) Cf. 'He is a realist, like Jane Austen, but the realist of a wider, as well as, lower, world; and a realist far less single-minded and content to take life as it is, He laughs at dreams; but he envies them.' F. L. Lucas, *George Crabbe, an Anthology*, p. xxvii.

- (5) '... it may be doubted whether, under any circumstances, his mind would ever have found much of the excitement of delight elsewhere than in the study of human beings.'

*The Life of George Crabbe by his Son*, p. 11. (World's Classics)

... be replied, that he preferred walking in the streets, and observing the faces of the passers-by, to the finest natural scene.' *ibid.*, p. 270.

なお後の引用文は、クラブの友人ノリス・クラークが、息子クラブに宛てて、今は亡き詩人との交際の思い出を書き送った手紙の一節である。

- (6) *The Life of George Crabbe by his Son*, p. 61.

- (7) *ibid.*, p. 159.

- (8) *op. cit.*, p. 202.

- (9) *ibid.*, p. 209.

- (10) *op. cit.*, p. 104.

- (11) 17世紀末以来書簡体小説が流行していたことも彼に示唆を与えたであろうが、この形式が特に効果的でもなく、クラブとしてはただ一度きりの実験に留まってしまった。

- (12) Cf. 'my own opinion is that the English writer with whom Crabbe has most in common is George Eliot... the mingled village tragedy and comedy, with the vices, virtues, and humours of the middle class, which George, Eliot understood so well, were equally familiar to the author of *The Parish Register* and the *Tales in Verse*...'

T. E. Kebbel: *The Life of George Crabbe*, p. 110.

また、イズラ・パウンドは『自治都市』から、漁村の情景を写した章句を二つ示したあとでこう



説話詩人クラブ

記している。

'perfectly clear even from these two excerpts that he is doing the novelist's work, Dickens, Dismeli, etc. History of the state of England at the start of the nineteenth century, Michlet's method already in use.

Ezra Pound : *ABC of Reading*, pp. 176—77. (New Directions Paper Book)

- (13) cf. "Ellen Orford," *The Borough*, XX, 11, 10—28.
- (14) cf. E. M. Forster: 'George Crabbe and Peter Grimes,' *Two Cheers for Democracy*, p. 170.
- (15) *ibid.*, A. W. Ward, ed : *Poems by George Crabbe*, vol. II, p. 8.
- (16) *ibid.*, II, p. 9.
- (17) *ibid.*, II, p. 11.
- (18) *ibid.*, II, pp. 11—12.
- (19) A. W. Ward, ed : *Poems*, II, p. 300.
- (20) John Henry Cardinal Newman : *The Idea of a University*, p. 113 (Rinehart Ed.)
- (21) William Hazlitt : *The Spirit of the Age*, p. 330 (Everyman's Lib.)
- (22) Harold Child : 'George Crabbe,' *Camb. Hist. of English Literature*, XI,
- (23) Lilian Haddakin : *The Poetry of Crabbe*, p. 132 and p. 155.
- (24) S. T. Coleridge : *Table Talk*, pp. 293—94 (Oxford Ed.)
- (25) Harlold Tennyson : *Tennyson : A Memoir*. E. Fitzgerald : *Readings in Crabbe's Tales of the Hall*,